

ものとは、一見して容易に区別がつく。

穿孔についての要約 以上のような諸点を総合して、次のようなことが要約し得る。

1. 穿孔は左右の殻で余り数で差がないこと。
2. 殻頂とその付近（第一成長線の区画内）に最も穿孔数が多いこと。
2. 中央基準線上とその直後の-1区画内が殻頂に次いで多いこと。
4. 中央基準線から前方には、きわめて少なく、左右殻合せて僅かに8個であつたこと。
5. 殻頂から殻の縁辺に向つて遠ざかるほど、急に穿孔の割合が少くなること。
6. 殻の最外縁で外套膜線に当る部分より外側に

は、全く穿孔されていないこと。

以上ツメタガイの穿孔について、主として空き殻を通じての計測的な調べをして見たがなにしろ貝殻への穿孔手段にしても、内部の肉を食べる方法にしても、一切は砂のカーテンの中で行われることであり、作業中少しでも不自然な刺激が加われば、これらの進行を停止するばかりか、急いで口さきも足も自分の殻内に引きこめるので（実際は膨大な足の殻内引きこみはそう急には行われないが）その真相をつかむことはさぶる困難で僅かな材料でいたずらに勝手な憶測することは、十分に慎しむべきことであるから、今後さらに飼育もし、現地についての観察も行つて、真の生活機構を明かにして見たいと思う。

明 石 原 始 林

AKASHI VIRGIN FOREST.

木 村 正 司

明石原始林は、また桜堀自然文化苑とも言われ、明石城の北側にある桜堀附近は、自然美豊かな、天然の宝庫である。従つて自ら植物の生育にも適し、悠久の昔より、植物がよく繁茂して居り、正に神秘的な自然の幽邃境をなしている。

この附近は大昔より何等人工を加えず、自然のままの林相で、特に常緑広葉樹が多く、モチノキ科のモチノキ、クスノキ科のヤブニッケイ、クスノキ、ウコギ科のカクレミノ、ツバキ科のツバキ、モッコク、ヤマモモ科のヤマモモ、ブナ科のアラガシ、アカガシ、イタジイ等がみられる。

落葉樹では、カエデ科のタカオモミジ、ハゼノキ科のヤマハゼ、リュキュウハゼ、バラ科のヤマザクラ等が自生している。

明石公園の桜堀附近は、暖帯林に富み、模範的な暖帯樹林相をしている。而して都市には稀にみる原始林であるから、天然記念物に指定して、植物の生態保護区域とすべきである。

多くの小鳥は、この樹林に集り、四季を通じて、小鳥のさえずりを聴き得る、まことに気持ちよいものがある。

かくして私共は、まことに得難い当苑の自然環境

を、益々保護育成して、その利用に努め、人類文化に能う限りの貢献を、もたらしたいものである。

又此処は古の昔より桜の名所でもある。因みに神代時代の歌謡中に「さきくにさくらん、ほきくにさくらん」とサクラを誉め称えたことが、今に伝わる。江戸時代における、かの有名な、本居宣長の歌「敷島の心和心を人間はば、朝日に匂ふ、山桜花」は、真に日本人の脳裡より忘れ得ぬ、誠に清い心を現わしている。

（明石東高校教諭）

追記、戦前の明石公園は大樹が密生し大原始林を思わせていたが、大樹は総て戦争の犠牲となった。

特に城の南面は早くから各種のものが栽植された。例えばアメリカよりニレツバスイシヨウ（ラクウシヨウ）の巨木、中国からの椿（チャンテン）の巨樹、数本のあること、イチイガシの巨樹多数のあること、また溝中にはヨーロッパからのオオブサモ、園内処にはトウネズミモチなどのあることは特記に値する。

また、この珍らしい植物にはオオバグミ、ウバメガシなどの巨樹、溝中のドクゼリ（トウネズミモチ）の群落は特に珍らしい。

なお終戦当時まではニオイタデが群を作つて生えていたが、現代は見つからないのは淋しいことである。